

## 三浦綾子論 (三) —『続氷点』—

\* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

### A study of Ayako Miura(3)—“Continued Below Freezing Point”—

—

『続氷点』が書かれる前に、三浦は『ひつじが丘』『積木の箱』『塩狩峠』『道ありき』『裁きの家』といった作品を立て続けに発表していた。既に彼女は人気作家としての地位を確立した感があつたし、熱心な読者を獲得もしていた。その中であつて、なぜ彼女は『氷点』の続編を書かなければならなかつたのだろうか。

確かに『氷点』は大きなブームを巻き起こした。しかし、その続編を書くということは我々の想像以上に困難を伴つたはずである。

『氷点』の場合、殺人犯の娘を引き取るという設定の特異さそのものが読者の関心を引くに十分なものがあつた。しかし、続編ではもはやそれに頼るわけにはいかない。その点で三浦は敢えてその難しい課題に挑んだと言えるのである。

『氷点』では、陽子に対して多くの同情が寄せられたことは確かである。だが、その一方で陽子が完璧すぎることに対して疑問の眼が向けられなかつたわけではない。「嫌みだよ。わたしが夏枝でもいじめるもの。」(『百年の誤読』という豊崎由美の発言が出てくるのもそのためであつた。

『氷点』の中で十分追求されていなかったのは、陽子の正しさ、健気さの奥にあるものである。「自分は正しい」と思うことはいい。しかし、そこには「自分が正しくさえあれば」という偏狭さが伴つていた。これはしばしば夏枝に冷たい仕打ちを受けていくプロセスの中で、陽子が彼女なりに身につけていかざるを得なかつた処世術であつたのだろう。その点彼女にも同情すべきところは

ある。しかし、自己を他者からまったく別のところに置いておくという生き方は、他者との関わりを避けられない人間関係において必ず破綻をきたすであろう。なぜなら、このような生き方は他者がある意味で遮断することに他ならないからである。少なくとも、彼女が本当の意味で人を愛し、真の人生を歩んでいこうとするなら、他者という存在を丸ごと受け入れていくだけの度量や覚悟が必要とされるのである。

『続氷点』における陽子は、その課題を担うことになる。自分は殺人犯佐土雄の娘ではなかつた。しかし、そのことは彼女の心に解放をもたらしたわけではない。彼女は自分の出生の秘密を知るに及び、自分が望まれて生まれた子供ではなかつたと思い込み、愕然とさせられる。それまで「正しさ」にこだわって続けた彼女にとって、実の母である三井恵子が夫の出征中に下宿人の学生と深い関係に陥つて自分を出産し、しかも夫の知らぬ間に自分を乳児院に預けてしまったという事実は赦しがたいことだったのである。

『氷点』の結末では、自分は殺人犯の娘であると告げられ、遺書の中で必死に「ゆるし」が欲しいと書いていた陽子であつた。

けれども、いま陽子は思います。一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも、氷点があつたのだということ。

私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、「お前は罪人の子だ」というところにあつたのです。私はもう、人の前に顔を上げることができません。

\* 釧路高専 一般教育科 (国語) 小田島 本有

どんな小さな子供の前にも。この罪ある自分であるという事実で耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気がします。

(略)

おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるしください。

今、こう書いた瞬間、「ゆるし」という言葉にハッとするような思いでした。

私は今まで、こんなにゆるしてほしいと思ったことはありませんでした。

(遺書)

ここで陽子が「氷点」と言う時、それは自分が罪人の子であるという事実をさしている。自分に殺人犯の血が流れているということを知られ、彼女は自分も罪ある人間だと認識するのだ。しかし、これは極めて観念的な捉え方と言わなければならない。本当に「ゆるし」を求めるのであれば、陽子は直接相手に向かって「ゆるし」を乞うという行為があつてしかるべきである。しかし、彼女はそれをせず遺書を書いて薬を飲んだ。それは結局のところ、彼女がそれまでがつづけていた自らの「正しさ」が瓦解し、そのことに耐えられなかったからである。

自らは他者に「ゆるし」を求めていながら、他者、しかも実の母親をなかなかゆるすことのできない矛盾。彼女の抱えた問題の困難さはここにある。彼女が自分を棚上げして、実の母親に厳しくあたっていると批判することは簡単だ。だが、この矛盾そのものが人間本来の姿であるのなら、陽子はこのときはじめて人間として存在し始めたと言える。

ここでは、それまで彼女がこだわっていた「正しさ」そのものの在り方が問われている。いわば自分を周囲から隔離しながら守られていた「正しさ」はある意味で純粹培養されたものだった。彼女がそのことに固執するならば、三井恵子の行為は決してゆるすことはできない。それは彼女が人間の複雑さ、分かれなさと現実はまだ十分触れていないということでもあるのだ。果たして彼女は実の母親をゆるすことができるのだろうか。これが『続氷点』を貫くテーマである。これは決して簡単には解決のつかない問題だ。だからこそ時間がかかるのである。『続氷点』では三井恵子に対する陽子の頑なな姿勢が殊更眼を引く。

だが、その彼女もそのような自分を決して肯定しているわけではなかった。彼女には「ゆるしたい自分」と「ゆるせない自分」が同居しており、その両者の狭間で揺れ動いていたのである。

## 二

精神的に大きな傷を負った人間がその相手を簡単に「ゆるす」ことは考えられない。その傷が深刻なものであればあるほど、「ゆるす」という行為は困難を伴うのである。

ところで、『続氷点』にはひとつのキーワードが配されていた。それは「わびる」という言葉である。

それまでに何度か教会を訪れようとしながらも、それが果たせずにいた啓造をついにその気にさせたのは佐石の娘、相沢順子の言葉だった。

「陽子さん、わたしがあなたの立場なら、やはり本当のことはいえなかったと思うわ。だから、わたしにすまながることはないのよ。それよりも、わたしは父の罪をおわびしたいと願ひ続けてきたの。神さまにも許していただきかったの、こうしておわびできて、どんなに気が楽になったか知れないわ」

啓造はこの言葉を聞いた時、わびることのすがすがしさを感じた。確かに、神にも人にも一切をおわびたなら、どんなに心が晴れることだろう。自分の心の中には、今までの半生にわびなかったものもろのことが、おりのように一杯につまっているような気がする。自分も教会に行きたい。行つて、順子のように、神と人との前にわびる心を与えられたいと、啓造はつくづく思ったのだった。

(「奏楽」)

啓造が順子から得たのは、「わびることのすがすがしさ」であつた。「わびる」という行為は口先だけでは意味を持たないが、それが真摯なものであれば非常に尊いものであり、人を動かす力を持ちうることを啓造は身をもって体験したのである。また、「わびる」側にとつてもそれは一つの解放行為である。とにかく順子は「わびる」行為をようやく果たせたことで、新たに一歩踏み出すこと

ができたのであった。「ゆるしがほしい」という言葉を遺書の形でしか明らかにできず、服毒をすることで自らゆるしてもらおう機会を抹殺しようとした陽子と、直接相手に「ゆるし」の言葉を述べる機会を待ちつつ生き続け、ついにその願いを果たすことで解き放たれる順子との懸隔は余りにも大きい。自分をゆるしてもらおうための努力をしない人間が、憎むべき相手を心の底からゆるすことなど到底できないのである。

作者は、この「わびる」という行為に殊更重きを置いている。

実にさりげないエピソードだが、このしばらく後で啓造と高木が休暇を取って二人で旅行に出かける場面がある。これは夫のノイローゼを心配した夏枝が高木に頼んで実現に至ったものだった（このような心遣いを一方で見せている夏枝像を見逃すべきではない）。

この旅行中、京都で騒々しい鳴き方をする鳥に出会い、その鳥の名前を知るべく、啓造が近くにいた老人に尋ねるシーンがある。

「つかぬことをお尋ねしますが、いま鳴いていますあの鳥は何という鳥でしょうか」

老人は黙って杖に両手を置き、じっと目をつむった。一分、二分、老人は身動きもしない。やがて老人は、再び半眼を開き静かにいって頭を垂れた。

「すみません」

老人の口から出た言葉は「すみません」の一語だった。しかしその一語には、深い心がこもっていた。啓造は、去って行く老人の後姿をつくづくと見送った。行きずりの人間に鳥の名を尋ねられて、あんなにも一心に耳を傾け、そしてその名がわからないからといって、悪いことでもしたように深々と頭を垂れる。そんな人間がこの世にあるうとは、啓造はいまだかつて想像したことなかった。

（略）

自分たちには、あまりにもすまながる思いが少なすぎると啓造は思う。特に陽子に対しては、わびてもわびてもわびきれないはずだった。もし今の老人が自分の立場なら、どんなふうにして、陽子にわびをいうだろう。妻への復讐のために、陽子を育てたという恐ろしい事実には、今の老人なら、生きてはいられないほどのすまなさに、かりたてられるのではないか。死んでわび

ねばならぬほどの罪を犯しながら、自分は平気で生きていけると、つくづく啓造は思った。  
（『京の水』）

啓造がこの老人と関わったのはほんの数分ではない。しかし、彼はこの老人から強烈な印象を受けている。それはほんの些細な言葉に対しても決しておろそかにしない、この老人の誠実さに触れたためであろう。

老人の語った言葉は「すみません」の一語だけである。しかし、この一語はこの老人の人間性を表すには十分なものがあった。相手の質問から決して逃げることなく、この老人は一生懸命その答えを探していたに違いない。しかし、それでもその答えが見つからなかった。老人は相手の質問に答えられなかったことは勿論、答えを待って相手をその場に止まらせてしまったことへのおわびも込めて「すみません」と言ったのである。それだけにこの一語の持つ響きは非常に重い。

相沢順子、それに見知らぬ老人のエピソードは、「わびる」行為がいかに人の心を動かしかうるかを如実に示している。

陽子は長い間、実母の三井恵子をゆるそうとしなかった。その最大の要因は、恵子に会うことを潔しとしなかったため、恵子の「わびる」機会を奪っていたことにある。

陽子には幼い頃から培われた「正しさ」の観念が強固なものとしてあった。その観念からすれば、恵子は「夫を裏切った女性」でしかなく、「正しい」姿ではなかった。いつも正しくあらうとしていた陽子は、それを他者にも求めたのである。それが肉親であれば尚更であった。恵子を認めてしまうことは、陽子にとって自分の存在そのものを危うくすることになりかねない。

他者批判の厳しさは自らの潔癖さと表裏一体の関係にある。陽子が自らの「正しさ」に固執し続ける限り、恵子を「ゆるす」ことはできない。陽子がこのときひたすら守ろうとしていたのは自らの「正しさ」であり、そこには一種のエゴイステイックなものが含まれていた。

そのことを彼女が気づかされる場面は確かに作品に書かれている。それは辰子の松崎由香子批判であった。「思い立ったことを待たなしにやるっていうのは、つまり抑制のきかない、非行児的な性格なんですって」。この言葉は直接陽子に向けられてはいない。しかし、陽子はこれを聞いて、死にたいという自分

の気持ちにだけとらわれて周囲の気持ちを思いやれず、自殺を図ろうとした自らの行為を反省させられる。これが作品の結末で彼女が恵子をゆるすようになる伏線となることは明らかだ。

他者をどう受容できるか。これは我々人間にとって根源的な問題である。その点で、啓造が聖書の一節に心惹かれる場面は注目されてよい。啓造は、妻マリアの処女懐胎を知らされたときのヨセフの内面に思いを馳せる。周囲の疑念の眼もあつたろうし、何よりも彼自身がその事実困惑したであろう。しかし、彼はマリアを信じようとしてその事実を受け入れる。啓造はその姿に深い感動を覚えた。夏枝と村井の関係を疑い、嫉妬の念を覚えて、殺人犯の娘を引き取るということ企てた自らの記憶があるだけに、ヨセフの態度は啓造には限りなく大きなものに思われた。このヨセフの受容精神こそが、『続氷点』のテーマである「ゆるし」に繋がるものであることは見やすい。

### 三

『氷点』を継子いじめという枠組みで単純に捉えることは却って多くのものを見誤る結果になりはしないか。

例えば、この枠組みに乗ってしまうと、夏枝をいじめ役(悪役)としてひどく単純化して捉えることになりかねない。

確かに夏枝は、幼い陽子につらくあたっていた時期があつた。しかし、これは夫の裏切りを知った結果引き起こされたものであり、彼女を本質的な悪人と捉えてよいことにはならない。彼女にそうさせてしまうだけの必然性があつたということだ。むしろ彼女の態度の中に、我々も同じ可能性を認める方が豊かな読み方というものだろう。事実、夏枝は事実を知るまでは陽子を溺愛していたのである。その彼女を変貌させてしまうほど、事実を知らされた衝撃は大きかったのだ。

作品の中で、啓造はしばしば妻の本質的な冷たさを感じたりしている。

他人から贈り物をもらったとき、啓造がいらいらするほど時間をかけて丁寧に包みを開く夏枝が、ひとたび中身を眼にすると必ずと言ってよいほどその品物に満足しない。啓造はこれを、彼女にもらい癖があるからかと感じたりしている。どのようなものでも喜ぶ陽子を見て、「貧乏くさい」とまで言い切るのが

夏枝だった。

また、旅先で行方不明だった松崎由香子に啓造が偶然会い、そのとき彼女が失明していたことが話題に上ったとき、その様子を「しあわせそうなのはあるまい。失明しているんだからねえ。」と言う啓造に対して、夏枝は「あら、失明している人が、必ずしも不幸とはかぎりませんわ。ヘレン・ケラーの例もありますでしょう。」と言う。このとき、啓造は夏枝の論理的な正しさを肯定しつつも、そこに「血の通っていない冷たさ」を感じている。

さらに、陽子の実母である三井恵子のこと話題に上ったときも、彼女の家庭のことを心配する啓造に対して、「仕方がないじゃありませんか。」と夏枝は言い放つ。「秘密をもったおかあさん(注・三井恵子)が悪いんですもの。第一、よそさまのお家のことを、そう心配したって、仕方ありませんわ。」という言葉に啓造は「氷のような冷たさ」を感じたりしている。

これらのことは、確かに啓造から見ると冷たさとし映らないだろう。しかし、夏枝のこのような発言は彼女なりの必然性があつてのことだということが分かる。

夏枝は日頃、家の中の掃除も行き届いているほどの綺麗好きである。美醜に対する感覚も殊更強い。そういう彼女であつてみれば、仮に彼女が誰かに贈り物をしたとしてもいい加減なもの贈らないはずだ。であるから、その価値の尺度があのような発言を生みだしてしまうのである。それは必ずしも彼女の冷たさばかりとも言ひ切れない。

あるいは、人さまの家のことを心配しても仕方がない、という発言は、他人の家の問題を本当に解決できるのはその家の人間だけであるという認識を夏枝が示したものと捉えることも可能だ。周囲が心配して介入しても事態が逆にこじれてしまう場合だってある。

こう考えていくと、夏枝は冷静なりアリストであつたと考えるべきなのではあるまいか。これは誰もが冷静さを失った場合、却って必要なものである。ただし、彼女に欠けているものがあつたとすれば、それは自らの言動が周囲にどのような思いを抱かせるか、ということについての配慮だつたと言つてよい。

夏枝の陽子いじめの典型的な例として挙げられる給食費滞納や学芸会で白い服を作つてやらなかったことも、陽子を困らせてやろうという積極的な意志から生まれたものというよりも、私には陽子の素性を知った夏枝が、それまでの



溺愛ぶりに空しさを覚え、陽子そのものに関心を失ってしまったからだと考えた方がしっくりくる。度重なる陽子からのお願いは夏枝には煩わしいものにかねえなかったというのが真相に近いのではないか。

ただ、陽子が中学校を卒業する際に総代となつたとき、答辞の原稿を白紙のものとする替えた事件には、夏枝の明らかな悪意が感じられる。

この夏枝の行為が生まれるには一つの伏線があつた。それは両親の口論をたまたま立ち聞きしてしまった徹が、自分の母親と村井との間における「ふしだらな」関係、更に陽子出生の秘密を知り、親への反抗から学校の試験でどの学科にも白紙で答案を出すようになったことである。この反抗が始まる前、成績優秀だった徹は卒業式での総代が決まっていた。その晴れがましい機会を徹は自ら放棄したわけだが、夏枝にしてみれば、これは殺人犯の娘陽子のせいにならなかつた。

言うまでもなく、これは陽子が責任を負うべきことではない。ただ、夏枝にしてみれば実の子である徹が総代になれず、陽子が総代になるというのは許しがないことだったのである。

そもそも徹の反抗にしても、それまで両親に対して誇りを抱いていた分だけ失望が大きかつたということである。したがって、徹の反抗には偶像破壊という側面があつた。これはちょうど彼が反抗期を迎えていたという事実と結びついてもいる。それまでまさに優等生として生活してきた徹にとって、親の期待を裏切ること、すなわち優等生の殻を脱ぎ捨てるが必要だった。彼の他者批判の厳しさは、ある面において成長期における避けられないプロセスでもあつたのである。

壇上に上がっていざ答辞を読むとして、それが白紙にすり替えられていることに気づいた際、陽子はそのことが夏枝のしわざであることを察している。彼女が即席の挨拶の中で、「大人の中には意地の悪い人もあるのではないかと思います。その意地悪に負けてはならないと思います。どんな意地悪をされても困らないぞという意気込みが大切だと思うのです。泣かせようとする人の前で泣いては負けになります。その時にこそ、にっこり笑って生きて行けるだけの元氣を持ちたいと思います。」と述べたのは、明らかに夏枝を意識してのものであつたし、この言葉が陽子の生き方を端的に示してもいた。

その彼女が夏枝に対する認識を変えるのが、「殺人犯の娘だ」という事実を伝

えられたときである。ただ、このときはそれまでの夏枝の仕打ちにはそれなりの理由があつたのだということを理解したまでである。

その彼女が夏枝のやさしさに気づく場面がある。それは夏枝、陽子、辰子、それに由香子の四人で旅行した際、目の見えない由香子にいろいろと手を貸してやる夏枝の姿に触れたときだ。「陽子ちゃん、目がみえないって、つらいねえ。かわいそうねえ」と言う夏枝の言葉を聞いたとき、陽子はハッとさせられた。自分は今まで不当に夏枝を歪めて捉えていたのではないかと、彼女は反省させられるのだ。

作品には描かれていないが、たぶんこれをきっかけに陽子の表情が穏やかになつたのではないか。その日の晩、ベッドの中で、「あのね、陽子ちゃん。おかあさんね、飛行機の中で、もし万一飛行機が墜落したら、何が一番心残りかと思つたのよ。陽子ちゃんに心からあやまっていけないこと、それが一番心残りだと思つたわ」と夏枝が言うのは偶然ではない。このとき、夏枝は「わびる」行為をしている。それはそれを受け入れられるものが陽子の中にも生まれていたということだ。夏枝を今までとは違つた観点から眺められるようになったとき、陽子は実の母である三井恵子をゆるすスタート地点に立てたとも言えるのである。

実は『続氷点』上巻の最後にも、夏枝の心遣いが見られる箇所を見出すことができる。

啓造・夏枝夫妻が松崎由香子のことを話している中で口論となる。書齋に戻つた啓造は、このとき耳鳴りと後頭部に突き刺すような痛みを感じた。このとき啓造は（このまま死んだら……）という思いに捉われる。

やがて症状がおさまったとき、階段を陽子が上がってくる。彼女は「あら、おかあさんのおっしゃったとおりね。ストーブに火をつけていらつしやらないわ」と言つて、ガスストーブのスイッチをひねる。ここからも分かるように、啓造が風邪でもひかないかと心配した夏枝が、喧嘩の直後ということもあり、自分は今か陽子に啓造の部屋を確認するよう促していたのである。さりげない場面であるが、夫婦の機微がうまく描かれていると言えよう。

『氷点』の主題が原罪にあるとは作者自身の発言である。作者はさまざまな機会に、原罪とは「的を外れて生きることだ」と述べているが、これだけではキリスト教に無縁な人間にはなかなか理解しにくいに違いない。我々が原罪と聞いてまず思い浮かべるのが、禁じられた林檎の実を食べたことで楽園を追放されたアダムとイヴの話である。人間はこのとき以来、原罪を抱えて生きるようになったと言われる。

そもそも罪とは何なのか。まずはそのことが問われなければならない。

ここで想起されるのが太宰治の『人間失格』だ。「第三の手記」には葉蔵と堀木が対義語（アントニム）の当てつこをし合う有名な場面がある。罪のアントニムは何かという葉蔵の問いかけに対し、堀木は平然と「法律さ」と答え、葉蔵の反論を受けている。「しかし、世間の人たちは、みんなそれくらいに簡単に考えて、澄まして暮しているのかも知れません」という葉蔵の言わんとすることとは何なのか。「悪と罪とは違うのかい？」という堀木の質問に葉蔵は「違う、と思う。」と答えているのである。

罪を犯すとそれに相当する罰が与えられる。それを定めているのが法律だ、というのが通常の人間の理解である。しかし、葉蔵が「悪と罪とは違う」と言い切るのは、世の中には決して法律では罰しきれない罪があるということではないか。

たとえば、石川達三の『青春の蹉跌』では、司法試験に合格して将来を約束されたはずの江藤賢一郎が家庭教師をしていた大橋登美子から妊娠を告げられ、一方で進んでいた縁談に支障が出ることを恐れ、彼女を殺害する。後日逮捕された江藤は、殺害された登美子が宿していた子供が江藤の子ではなかったことを告げられる。その男を捜してほしいと要求する江藤に対し、刑事はその言葉に同情しつつも、「別にその男は悪いことをしたわけではないんだからね」と論ずるところで作品は終わっている。ここで刑事がいう「悪いこと」とは、法律に触れる行為のことである。賢一郎は法律のエキスパートとして設定されており、これをマスターすればこの世の中を渡っていけると信じていた。しかし、法律は決して全能ではない。世の中には決して裁くことのできない罪というものが存在する。結末で賢一郎が知らされたのは、この重い現実ではなかったか。しかし、このとき、賢一郎は登美子を妊娠させた男の罪は認識できても（それはあくまでも自分を陥れた張本人という範囲においてであるが）、自らが登美子に

対して行っていた行為の罪を十分自覚しきれていない。賢一郎にはその相手の男と共に、登美子そのもののへの怒りがあつたに違いない。確かに登美子は責められても仕方ない行為を犯した。しかし、彼女をこのような行為へ駆り立てた背景には、賢一郎自身が彼女に対して行っていた数々の罪深い行為があつたことは容易に頷ける。

同様のことは、森鷗外『舞姫』の主人公、太田豊太郎の場合にも言える。彼もまた、江藤賢一郎と同様、法学士であった。同棲したエリスが発狂に至つたのは、友人の相沢謙吉の余計なお世話に原因があつたという思いを豊太郎は否定することができない。彼が天方伯と一緒に帰国するよう促され、「否」と答えることもできずに承諾してしまった事実を、相沢は豊太郎が人事不省に陥っている間に告げた。それが末尾の「一点の彼（注・相沢）を憎むところ」という表現に端的に示されている。相沢の行為がエリス発狂の引き金となつたのは確かである。しかし、それはあくまでも引き金であつて、そもその原因は豊太郎にある。同棲中もエリスはしばしば、豊太郎との関係に対する疑念を表明していた。それは、豊太郎が今後二人の関係をどうするのかという、必要な話をしてこなかったことにある。エリスは場合によっては母親を捨てて、豊太郎と一緒に日本に赴く覚悟すらしていた。一方の豊太郎には、そのような覚悟はない。いつも曖昧なままにしたままで、二人の関係をずるずると引きずっていたのである。妊娠が分かつたときもエリスは身体いっぱい喜びを表していた。しかし、一方の豊太郎は愕然とすることしかできない。二人の関係について、将来的な展望を彼が何ら持ち合わせていなかったからである。

豊太郎は自分が天方伯の誘いを断ることもせず受け入れてしまったことに、罪の意識を感じてはいる。しかし、事はもっと深刻である。当時の日本の状況を考えるならば、ドイツの女性、しかも踊り子だった女性を日本に連れ帰ることがどれほど大きな困難を覚悟しなければならぬものだったかは、想像に難くない。しかも、彼はこのエリスとのことであらぬ噂を立てられ、それがもとで免官にも追い込まれていたのである。だとすれば、豊太郎自身、決断ができなかったというのが真相だろう。そのため、彼はエリスに将来的な話ができなかった。しかし、このとき、彼が自分の心の迷いをエリスに正直に語っていたならば、状況はもっと大きく変わっていたはずである。彼は自分の悩みを自分の内に抱え込むことしかできなかった。そして、エリスと本質的な会話をする道

を閉ざしてしまった。だが、彼はこのことをおそらく自らの罪とは思っていない。エリスは発狂する際、「かくまでに我を欺き玉ひしか」と叫んだという。この叫びがなぜ生まれたのか、豊太郎は深刻に受け止める必要がある。

幾つかの例を挙げたが、ここで言いたかったのは、一口に罪と言ってもそれは多様な広がりを持つということである。

それでは、『続氷点』に話を戻してみたい。

作品の中では、この罪という点に関して啓造と陽子が非常に興味深い会話を交わす場面が見られる。

話題は、啓造の病院で起こったことである。六人部屋に一人の老婆がいた。糖尿病を患っていたが、突然医師の許しを得ずに退院した。その理由は、同室の若い女たちが自分に声をかけてくれないことだった。周囲も全く声をかけなかったわけではないが、つい若い人だけで話し込んでしまい、その老婆は話の圏外にあったという。そのことが老婆にいたたまれないほどの疎外感を与えたとのことである。

若い女たちは、誰一人、自分は悪くなかったと思っている。彼女らにとつては、その行為は小石でさえもないのだ。憎んだり、悪口をいったりする積極的な罪さえ、世の常と思っている。まして無関心などは、意識にすらのぼらないのだ。

（あじさい）

このように罪とは明確に把握したいものである。それだけに我々は知らず知らずのうちに罪深い行為を犯しているのではないか。そのことを象徴的に訴えるために、作者はキリスト教の原罪ということを持ち出したのである。

## 五

個人主義を徹底させると人々は本質的に「淋しさ」を感じなければならないと述べたのは、学習院の生徒を前に「私の個人主義」という講演を行った夏目漱石であった。

実は、さきほど挙げた夫婦喧嘩の直後、夏枝も陽子に「生きるって淋しいわね」と語っていた。それを聞かされた啓造は「その淋しい者同士が、何でつま

らぬ争いをくり返すのか。淋しければ肩をよせ合って、仲よく生きるべきなのだ。」と反省せずにはいられない。

『続氷点』は、夏目漱石を根底のところ意識していたと言つてよいだろう。

漱石がとりわけ作家生命の後半期に三角関係をさかんに取り上げていたことは有名である。そのパターンはさまざまであるけれども、漱石は執拗なまでにこのテーマにこだわった。彼がこのテーマにこだわったのは、彼の個人主義観とも密接な関係がある。人は誰もが自我（エゴ）を抱えている。人は他者との関わりを抜きにして生きていくことはできない。他者もまた自我を抱えた人間であるなら、我々はそれぞれの自我とどう折り合いをつけていくのか、という課題を背負わされていると言つてよいのである。自分の自我に忠実であること、それが本来の個人主義の考え方であるが、それを推し進めようとすると我々は何らかの形で「淋しさ」を逃れられない。それがもつとも露わになるのが三角関係だったのである。

三角関係を扱った漱石作品の中でも『こゝろ』はその最たるものだ。

『続氷点』では、徹と北原が『こゝろ』における三角関係を話題にする場面が見られる。北原は言う。「ぼくは諦めようと思つてきた。漱石の『こゝろ』のような友人関係には、なりたくないと思つてね。しかし、今日陽子さんに会つて、正直のところ、会わなければよかったとも思うよ」「辻口、人間、そう簡単に忘れられるもんじゃないんだね。とにかく君のいうとおり、せつちちにはなるまいと思うよ」。これに対し、「宣戦布告だね」と徹が冗談めかして言い、北原も「そうだ。宣戦布告だ」と笑う場面が続く。

『こゝろ』も『続氷点』も、親友同士が一人の女性に思いを寄せる三角関係が描かれている。ただ、三浦は『こゝろ』とは違った三角関係のあり方を意図的に描いていた。

『こゝろ』の場合、その三角関係は極めて閉鎖的であり、お嬢さん自身が与り知らぬところで隠微な三角関係が進行していた。Kは「先生」にお嬢さんへの思いを打ち明けるものの、それを直接本人に伝えることなく最後には自ら命を絶っている。親友である「先生」もお嬢さんへの好意を抱いていたが、そのことは終始Kには秘められたままだった。当人たちの胸の内でのどのような思惑が働いていたかは読者が想像するしかないものの、表面的にはこの三角関係は「宣戦布告」なしの隠微な確執であった。この隠微な姿こそが後の悲劇を生み



出したのは実に見やすい。この作品が今でも多くの読者の心を捉える一方で、その不健康さがしばしば指摘されるのはそのためである。

『続氷点』はその点から言えば、『こゝろ』の三角関係とは対極的な方向を示していた。北原と徹との間には「宣戦布告」があり、二人の思いはそれぞれ陽子に直接伝えられていた。ただ、互に意思表示をすることで当人たちの悩みが必ずしも軽減されたわけではない。むしろ表面的な健康さを示すだけに、逆に彼らの内面に抱えた悩みは深かったとも言える。とりわけ、徹の場合、陽子とはずっと「妹」として一緒に育ってきた経緯があり、それが彼の行動をいろいろと彷徨わせることにもなった。「妹」であるという事実を尊重し、潔く身を引こうとして北原を陽子に紹介したのは徹自身だった。しかし、それは徹に更なる悩みを付加しただけであり、心ならずも徹は三角関係を作り出してしまったのである。このように自ら招いた行動によって悩める存在に落ちこんで行くあたり、徹は紛れもなく辻口啓造の息子であった。

いずれにせよ、二人の男性が思いを告白することで、陽子はそれを自分の問題として受け止める立場に置かれた。北原が登場するまで、陽子は恋愛らしいものを経験した形跡はない。父親の啓造との会話の中で、初めて「愛」という言葉を発した自分に気づいて思わず顔を赤めるほど、陽子は恋愛そのものとはまだ無縁な女性だった。その彼女は徹と北原の告白を受け、自分がいかなる選択をするかという課題を与えられたのである。二人の男性が率直に自分の思いを告白していることもあり、陽子もまたそのときにおける自分の気持ちを正直に打ち明けている。

「……北原さん。わたし、正直にいます。いつかもういったように、あの川原で……薬を飲む前までは、たしかにあなたが好きでしたわ」

陽子は低い声でいった。北原は大きくうなずいて、テーブルの上に身をのり出した。

「でも、わたしが最後の手紙を書いた時、一番会いたかったのは、自分でも思いがけないことにそれは兄だったのです」

「……」

「そして、あの苦しい何日かが過ぎたあとは、わたしの胸にはどなたも……。だけどあれから三年近くたった今、わたしは、また変りつつあるような

気がするんです」

「変りつつある？」

「どういったいいかわかりませんが、徹にいさんは、少年の頃から、わたしをやさしくかばってくださったでしょう。その気持を、わたしはもっと大事に受けとめなくてはいいけないような気になっているんです」

じつと陽子の目をみていた北原の視線が、自分のひざに落ちた。北原は身動きもせずに、ひざ頭を凝視したまま何もいわなかった。陽子は残酷なことをいったようで、いたたまれない思いがした。

(追跡)

陽子はその時点での自分の正直な気持ちを打ち明けている。それがたとえ相手には残酷なものであろうとも、そのいたたまれない思いもすっかり受け止めているのが重要だ。このとき、北原にとって陽子の言葉は痛かったに違いない。しかし、北原はその言葉を誠実に受け止めている。最終的には陽子は北原を選択することになるのだが、そのときこの場面がいささかなりとも影響を与えているのではないか、というのが私の読みである。

このとき、確かに陽子は嘘を言っているのではない。ただし、徹に気持ちが傾いている一つの理由として、今まで兄として自分をかばい続けてくれた徹に対する感謝というのを彼女は挙げていたのである。「大事に受けとめなくてはいいけない」というのは、彼女の心というよりも彼女の頭から生まれた言葉なのだ。

また、「ぼくよりも辻口のほうが、あなたを幸せにしてあげられる人間です」と言い切る北原に、陽子は彼の人間的な大きさを感じ取ったに違いないのである。そう言えば、徹と北原はお互いを尊敬し合う気持は終始変わることがなかった。それが、『こゝろ』とは違った健康さを読者に印象づけているのである。

## 六

最初は怒りから発した徹の三井恵子への接近であった。陽子が自殺を図ろうとするほど苦しんできたのに、実母の恵子是小樽で幸せな家庭生活を営んでいるという。そのことが徹には許せなかったのである。

徹には自分が陽子に代わって恵子を追及しているのだという自覚があった。しかし、陽子自身は実母に会いたいという意志をもっていたわけではないし、



彼女への追及を徹に頼んだわけでもない。徹の行為は陽子のためではなく、自分のためであつたのである。陽子に対する思いをこのような形で代償行為させている自分自身に徹本人も気づいてはいない。

彼には彼なりの正義感に駆られているという自負があつた。しかし、このような行為が次なるドラマを引き起こしてしまう。その軽率さを彼が痛感させられたのが、恵子に陽子が自殺未遂を図つた事実を打ち明け、その直後自動車を運転していた恵子が自己を引き起こしてしまったことを知らされたときである。

三井恵子が、車を運転して帰るのをしりながら、自分はショッキングな言葉を吐いた。それは高木にいわれたとおり「運転手に酒を飲ませるより、もっと危険なこと」だつた。それをあえてしたのは何か。自分の心の中にいつも巣喰っている、人を責める思いではないか。夏枝を責め、啓造を責めて来た思いが、恵子をも責めずにはいられなかったのだ。つまりは人を責める自分の心が、あの事故を引き出したのだ。

（「草むら」）

このように自らを反省せずにいられない徹は、恵子に恨みの言葉をぶつけられても仕方がないと考えていた。しかし、予想に反し、彼女は徹を非難するどころか、過去の自らの行為について自己弁護すらしようとしめない。素直に自分の過失を認める恵子を目の前にして、徹は彼女を陽子に会わせたいという思いを抱くのである。

恵子に対して、啓造もまた同様の思いを直接会つたことで抱くようになった。それがともすれば彼女に対して寛容な発言を生み出し、それが夏枝の癪に障ることにもなった。その点に関して言えば、夏枝の嗅覚は極めて敏感であつた。

作品の後半では、徹の不審な行動に疑いを抱き始め、やがては母親の恵子や陽子にそのことを問い質さずにはいられなくなる、衝動型の三井達哉の存在がクローズアップされてくる。達哉は言うまでもなく、陽子の異父弟である。

疑念を抱くとそのことを追及せずにはいられない三井達哉の行動は、時として常軌を逸した部分がある。その彼の行動に火をつけたのは、言うまでもなく徹の軽率な行動であつた。事実、徹はそのことを深く反省することにもなる。ただ、徹の行動があつたにせよ、なかったにせよ、恵子の過去はいずれ白日の下に晒される運命にあつたと言えよう。

達哉は母親を愛する思いが強く、それ故母親を偶像視するくらいがないわけではなかった。それだけに、母親の過去に疑念が生じたとき、彼は真実を知りたいという願望に駆られる。真実を確かめるため、彼は無理やり陽子を車で小樽に連れて行き、そこで恵子に会わせようとする。彼にとつても、已むに已まれない行為だつた。

その時に陽子が達哉に向けて発した言葉が注目される。

「達哉さんは、本当におかあさまが好きなのね」

「……」

達哉の唇がかすかに歪んだ。

「そんなに好きなおかあさまなら、たとえ何をしたって、ゆるしてあげべきじゃない？」

「いやだ。ぼくは母が美しいから好きなんだ。もし、そんな……うす汚れた人間だとしたら、決して許しやしないよ」

「でも、本当に好きなら、たとえ世界中の人に指さされるようなことを仕掛けても、あなただけは、好きになって上げて上げられるのではないかしら」

「それは、好きでも何でもない人間のいう事です。ぼくの母は……」  
いいかけて達哉は、ふっと不機嫌に黙りこんだ。

（「追跡」）

コミュニケーションには〈私―彼〉チャネル、すなわち他者コミュニケーションと、〈私―私〉チャネル、すなわち自己コミュニケーションがあることを指摘したのは『文学と文化記号論』（岩波現代選書、昭五十四・一）を書いたロトマンであつた。他者コミュニケーションと自己コミュニケーションは別個のものとしてあるのではない。右の引用箇所はそれが端的に表れている。

ここで陽子は、形のうえでは達哉に向かって語りかけている。しかし、「好きなおかあさまなら、たとえ何をしたって、ゆるしてあげるべきじゃない？」という言葉は、彼女が自分自身に語りかけてもいるのであつた。そのことに、この時点で彼女がどの程度自覚的であつたかは予測しがたい。しかし、達哉への忠告の言葉がとりもなおさず自分への忠告へと繋がっている。「うす汚れた人間だとしたら、決して許しやしない」という達哉の言葉は、実はそっくりそのまま陽子の言葉でもあつたはずである。しかし、彼女はこの言葉を達哉から聞く

ことによつて、その言葉そのものを対象化し得る位置に立った。このとき、陽子は確実に変わった。結末で彼女が恵子をゆるす伏線が確かに張られたのである。陽子を変えるきっかけを作ったのは達哉の言葉だった。

この作品では、もう一人、「ゆるす」行為を積極的行った人間がいた。それが恵子の夫三井弥吉である。

『氷点』の結末では陽子の出生の秘密が高木によつて明らかにされ、『続氷点』では徹の行動が三井達哉の疑惑を拡大させる形で物語は進行してくる。過去の事実が暴かれざるを得なくなる展開の中で、読者の興味は恵子の夫である弥吉に当然向かうことになる。達哉が引き起した事故によつて北原が重傷を負い、そのため恵子はすべてを家族の前で告白することになった。この場面は書きよるによつては、大変な修羅場も予想されるところである。事実、これを聞いた達哉は大きな衝撃を受けた。

しかし、三浦はこれを具体的な場面として描くことをせず、三井弥吉から辻口夫妻への手紙という形で処理をした。この手紙の中で明かされるのが、弥吉の戦争体験、すなわち戦線で上官の命令に逆らうことができず、妊婦の腹を切り裂いたという事実だった。半ば唐突にこのことが語られるため、その展開の仕方に多少無理を感じる読者もあるかもしれない。三浦作品ではしばしばこのような展開が見られる。この作品の直前に書かれた『ひつじが丘』でも、ヒロイン広野奈緒実の父、慈悲深い牧師である耕介がかつて若い頃に妻の姉と過失を犯していたことが本人の口から告白される場面がある。このような唐突な展開が三浦文学への評価を一部では貶める結果になっている。

ただし、三浦に即した場合、弥吉がたとえ上官の命令であったとはいえ、残虐な行爲を行い、妊婦どころか胎児の命までも奪ってしまった罪の意識におののいていた事実を書くことは、作品の流れから言えば必然であった。なぜなら、弥吉が自分の出征中に不義を犯した妻をゆるす可能性があるとすれば、それはただ一点、妻がその子を堕胎しなかったという事実しか見出せないからである。もし彼女が堕胎したことを知ったとすれば、弥吉は悪夢の再現に苛まれることになる。それは弥吉を鞭打ち、絶望の底に突き落とすことに他ならない。

「ゆるす」ことを『続氷点』のテーマとして構想していた三浦にとつて、そのゆるしは心の底からのものである必要があった。無理に自分を抑制し、表面的にゆるす行爲をしたとしてもそれはいずれ破綻が訪れる。陽子が長い間恵子に

会うことを潔しとしなかった事実が端的に示すように、この作品において「ゆるす」行為は簡単なものではない。それにふさわしい実質をもった「ゆるす」が実現されるには、弥吉の側にもそれができるだけの裏付けがどうしても必要だったのである。

弥吉は人命を奪ったことに良心の呵責を抱いていた。おそらく、そのことはその後も長い間彼の心の内に秘められていたことと想像される。それだけに、妻が赤ん坊を堕胎しなかったということを知れたことで彼の心は救われた。彼はその事実に感謝の思いさえ抱く。そして彼は妻に騙されてやろうと決意するのである。恵子もたった一度の過失以後、夫への愛情に揺らぎはなかった。それを弥吉が信じられたからこそ、彼は妻を愛することもできた。弥吉は騙されてやることに一つの生き甲斐を見出す。それは、妻がたとえ不義の子であったとしてもその命を抹殺しなかったという一点において、彼女をいとおしみ、愛し抜く決意を固めたからであった。

その一点においてのみ、妻の過失をゆるすことが果たしてできるのか、という疑問は当然ある。しかし、彼もまた強いられたいえ、過失を犯し、そのことで良心の呵責に苛まれた人間であった。つまり、彼は妻を上から見下ろしているのではなく、まさに同じ罪深き人間として眺めているのである。人には他人を裁く権利などない。こう語る作者の肉声がここでは感じられる。

陽子は氷原を目の前にして、「自分を正しいと思うことによつて、いつしか人を見下げる冷たさが、心の中に育ってきたのではないか」とわが身を振り返る。

このとき、彼女の心に浮かんできたのが啓造から聞いた「原罪」という言葉であった。彼女はこのとき、自分の心の中に醜さがあったことに気づかされるのである。かつて彼女は遺書の中で、「罪をハッキリとゆるす権威あるものがほしい」と書いた。そのことが再び甦ってきたとき、彼女の目の前に広がったのが、「流水が燃える」見事な光景であった。彼女はこれを目の当たりにしたとき、血が滲み出たかのような錯覚に捉われる。彼女はここに十字架に磔にされたキリストのイメージを見出している。

自分をゆるしてくれる権威あるものを心の底からほしいと彼女が願ったとき、そこにキリストの姿が思い描かれたというこの場面は、自然が偶然作り出す不可思議な力を巧妙に捉えた圧巻とも言うべきだろう。

ゆるしを乞うとは、自ら謙虚になることに他ならない。自らの内にあった傲

慢さに気づき、ゆるしてもらいたいと祈る気持ちがキリストの姿を顕現させるのである。

言うまでもないことだが、この啓示的場面は突然訪れたのではない。陽子が心の彷徨を続け、その中で必死に生きようとするプロセスにおいて、彼女は確実に変化しており、夕陽のさした流水を目にするのはその終着点であった。そして、ゆるしを乞える人間になれたときこそが、実母である恵子をゆるせるときでもあった。『続氷点』は恵子に電話をかけようとする陽子の姿を描いて幕を閉じる。おそらく、彼女は真っ先に今まで頑なに母を拒絶しつづけた自分の傲慢さをわびるに違いない。